ここは神奈川県の一番西、東京から約90キロメートルの場所にある湯河原町。「たぬき」が発見したと言われる温泉があり、一年を通して暖かいこの町に、5匹の仲良したぬきが住んでいました。

海、山、川があって、季節ごとにいろんな花が楽しめる、自然がいっぱいの湯河原町は、たぬきたちにとっては絶好の遊び場所です。

ある日、たぬきたちは甘味処「四季彩庵」に集まっていました。小太郎と小梅のお父さんとお母さんが経営するお店で、小梅は時々お手伝いをしています。

たん平「おら、たんたんたぬきの担々やきそばー」

さくら「あたし、きび餅」

楓太「おいら、ほっかほかの温泉まんじゅう」

海人「おれはイチゴのかき氷」

お店の奥から小梅が、注文の確認にやって来ました。

小梅「えーと、たん平くんが担々やきそばで、さくらちゃんがきび餅。楓太くんが温泉まんじゅう。えーと海人くんは？」

海人「イチゴのかき氷っ」

小梅「小太郎おにいちゃんは何にする？」

小太郎「お水ちょうだい」

小梅「おまたせしました」

さくら「まぁ、きなこの甘い香り」

楓太「熱いっ、フーフー」

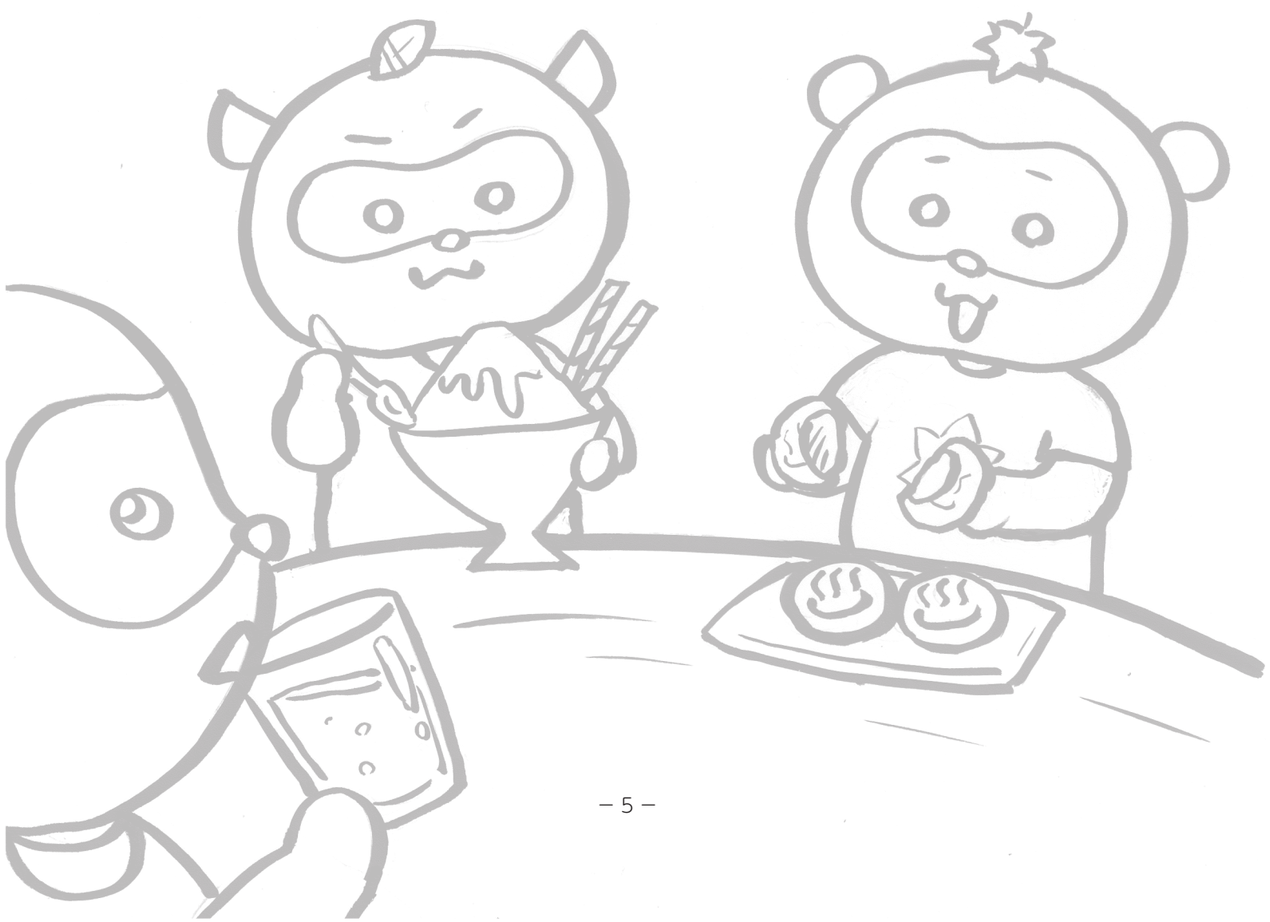
楓太は温泉まんじゅうを二つに割って冷まし始めました。

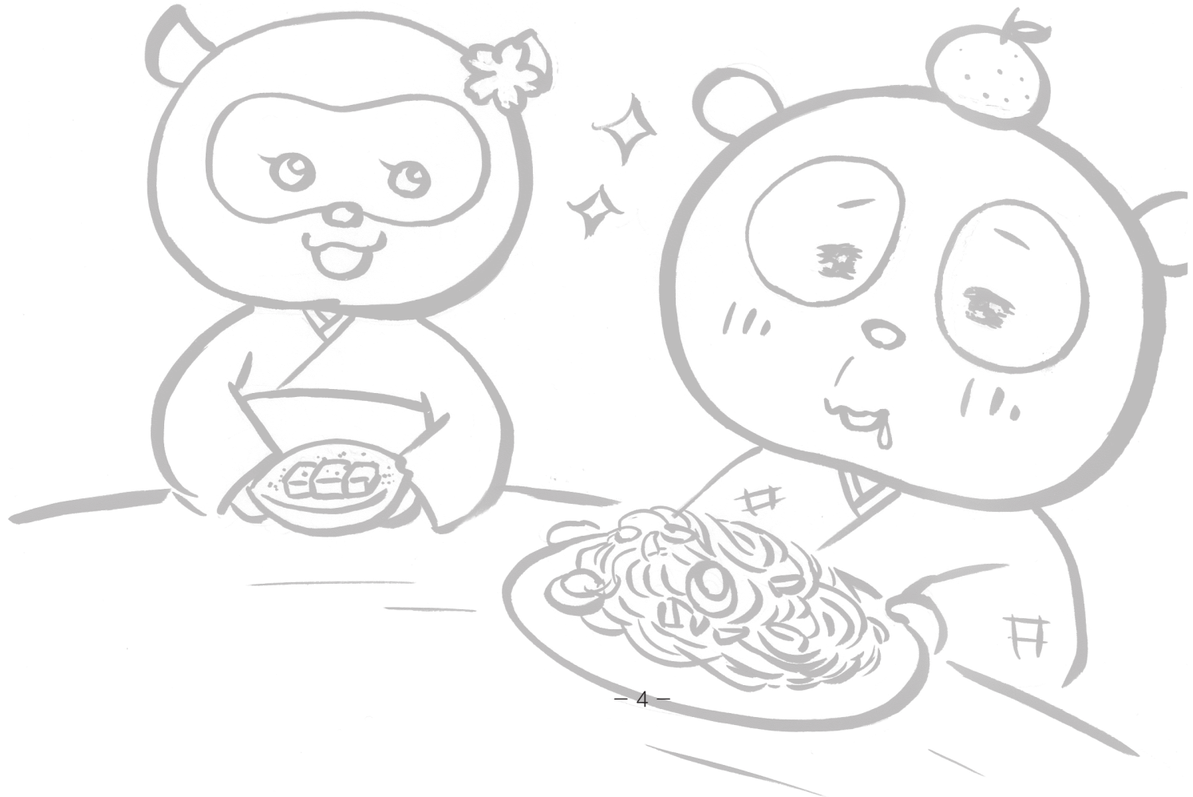
シャリシャリ…シャリシャリ…。海人はイチゴのかき氷をかきまぜています。

さくら「かき氷をかき混ぜるとすずしい音がするのね」

しばらくたつと、担々焼きそばのソースのにおいがお店中に広がってきました。奥の調理場からカラカラとフライパンを揺らす音が聞こえます。

たん平「あーいいにおい」





半熟たまごがのった、担々やきそばもたん平の前に置かれました。

たん平「いっただきまーす」

たん平「あー、やっぱり担々やきそばは、最高においしいよ〜」

さくら「ちゃんとかんで食べているの？　たん平」

たん平「んんんん・・・・」

と言った頃には、もうお皿の中は空っぽでした。

楓太「たん平。口のまわりに野菜のかすがついているよ」

たん平「あっ、ありがとう。ちゃんと、かんでいるよ」

小太郎はお水を3杯飲んでいました。

今日、たぬきたちは学校で「町の様子を調べましょう」という宿題を出されたので、四季彩庵に集まって相談をすることになっていました。

楓太「どうする？町の様子だって」

たん平「お店やさんめぐりは？」

さくら「楽しそうだわ」

海人「賛成っ」

小太郎「ぼくも一緒に行きたい」

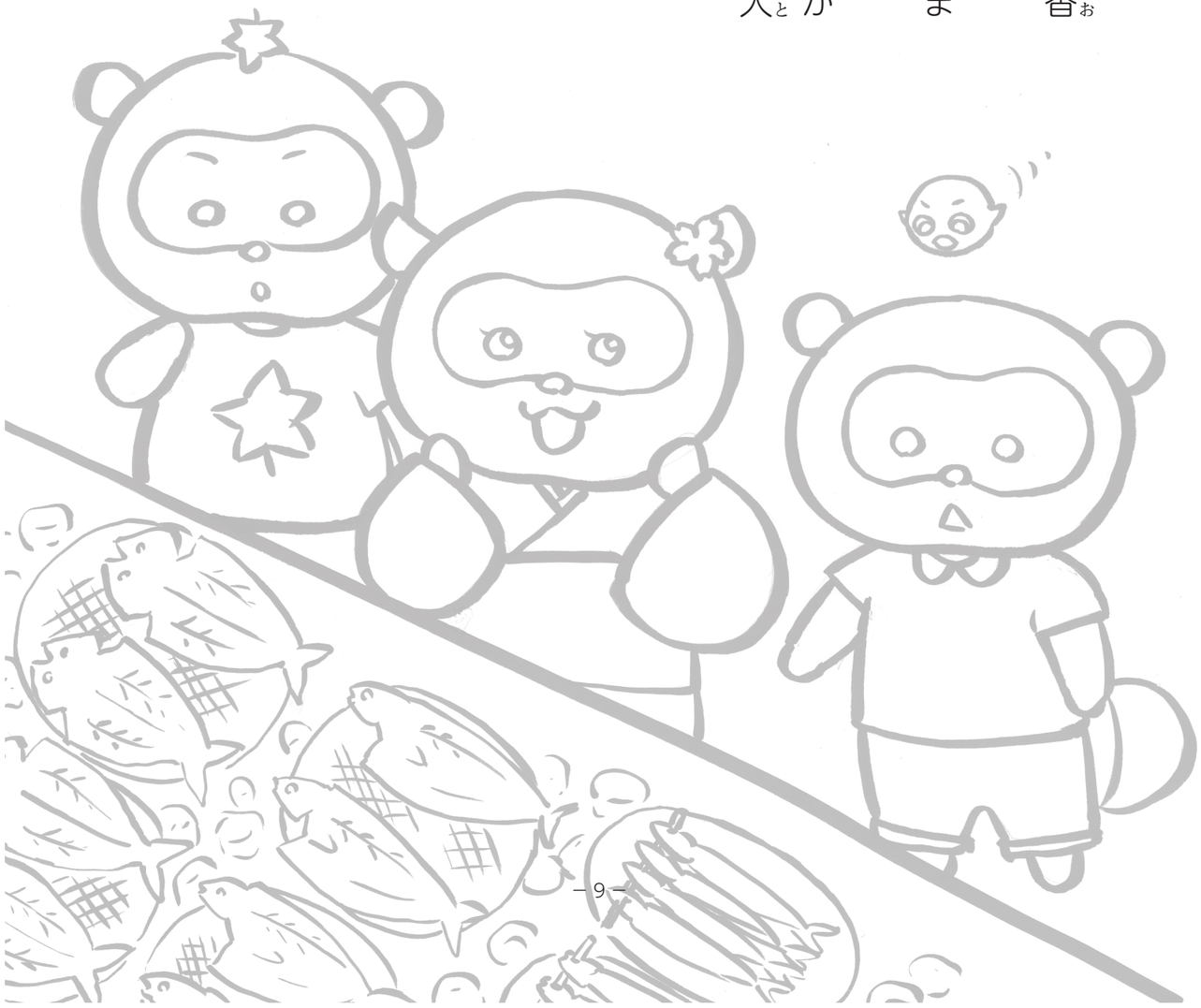
楓太「いいよ。一緒に行こう」

5匹はすっかり食べ終わると、お店を出ました。真っ先に向かったのは、そこから3キロほど歩いた先の干物屋さんでした。

さくら「こんにちは。わぁ、いい香り。海のにおいがするわ」

海人「これ知ってるよ。あじとかますとえぼだいの干物」

その奥の調理場では、とれたばかりの魚を洗ったり、開いたりする人たちが忙しそうに働いていました。



お店の裏では、たくさんの魚が風に当てられ、キラキラと輝いています。

さくら「こうやって魚を乾燥させて、干物になるのね」

お店屋さん「勉強で来たの？　偉いわね。これ食べてみて」

袋に入ったおみやげをひとつずつもらいました。

お店屋さん「魚を細かくしてから、練って焼いたものだよ。笹かまぼこって言うのよ」

さくら「おいしそう。すっごくもちもちしているわ」

たん平「ごちそうさまです。ありがとうございます」

みんながそろったところで、お礼を言ってお店を出ました。

お店屋さん「またいつでもよってちょうだい」

干物屋さんのとなりは八百屋さんです。きゅうりやトマト、キャベツにナス。たくさんの野菜がぎっしりと並んでいます。バナナやメロンやオレンジなどの果物もありました。

裏の畑に連れて行ってもらうと、ちょうどきゅうりが食べ頃のようでした。とうもろこしはたぬきたちを追い越すくらいの高さまで伸びていました。トマトも赤くなっています。

楓太「うわっ、痛いなぁ」

楓太がきゅうりをさわって

驚きました。

お店屋さん「トゲがあるのは新鮮な証拠なの。まだきゅうりの中では種が熟している途中ね。でも、このくらいとげがあった方がみずみずしいし、こりこりもしておいしいのよ」

お店の人はみんなに一本ずつきゅうりをもいでくれました。

ポキッ。とっても軽くて楽しい音がしました。

海人「おいしいっ。ホントだ。こりこりしているね」

みんなの口からぱりぱり、こりこりと音が聞こえます。

たん平「あーおいしかった。こんなとりたての、きゅうり食べたことなかったよ。ごちそうさま」

全員「ごちそうさまでした。ありがとうございました」

5匹のたぬきたちはお礼を

言って八百屋を出ました。

そのとなりには、せんべいやさんがありました。しょうゆの香ばしいにおいでたん平のおなかがグーと鳴りました。

たん平「あー腹へった」

さくら「今まで食べ続けだけど、まだお腹がすいているの？」

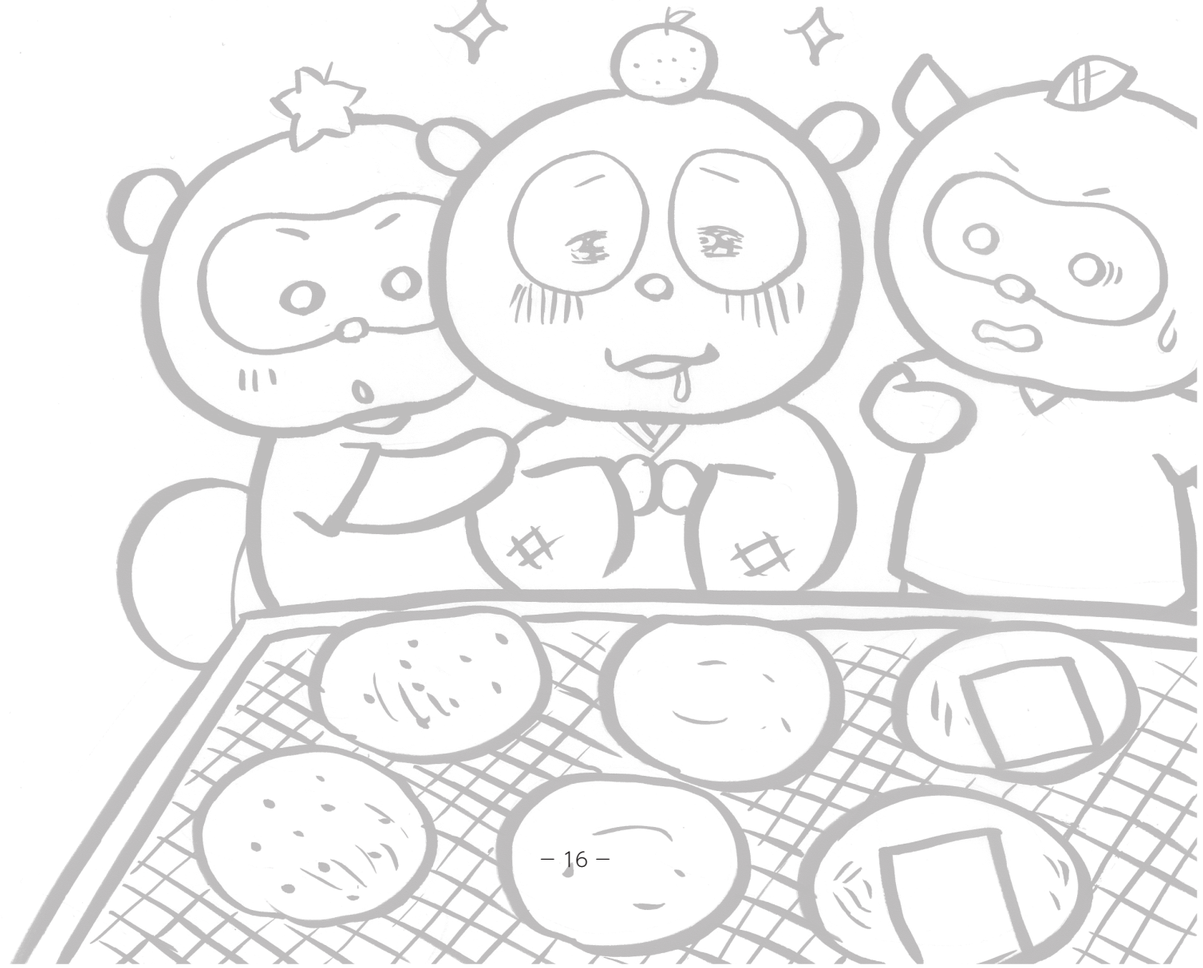
さくらはあきれたように言いました。

しばらく5匹のたぬきたちはその作業を店の入り口からのぞいていました。すると、お店の中から、リトルキャッツがずんずんと歩いてやってきました。

ボス「帰るにゃ」

ノラ「焼きたて、おいしいにゃん。ぱりぱりだにゃん。熱いにゃん。ボスっ、次はどこへ行くにゃん」

ボスはどんどん早歩きで歩くので、ノ



ラとブチは追いかけるのに必死です。

たん平はおいしそうなにおいに、待ちきれなくなって、緑色のせんべいを買ってみました。

たん平「いっただきまーす。んー……ん……からーいっ……」

それは、わさび味のせんべいでした。

たん平「お水お水っ……」

たん平は口をもぐもぐさせながらお水を欲しがりました。

海人「担々やきそばだって辛いのに」

たん平「おいしいけどちがう辛さなんだよぉ」

さくら「そうかしら？　あたしはそんなに辛くなかったわ。きっとたん平はわさびのツンとした辛さが苦手なのね。さわやかでおいしかったわ」

たん平「ふううう……」

水を飲んだたん平は少し落ち着いて、また次のせんべいを買いました。今度はたん平の顔くらいの大きなしゅうゆせんべいでした。

次のお店は乾物屋でした。

たん平「おら、お腹いっぱいだからここで休んでる」

すっかり満腹になったたん平はベンチで横になって昼寝をしてしまいました。

さくらたちがお店の中に入ると、リトルキャッツたちがいました。でも、ノラとブチはボスの買い物に飽きていたので、お店の中を行ったり来たりと落ち着きがありません。

しばらくすると、ブチが突然、さきイカのパックに指を突っ込んで穴をあけはじめたのです。

プツンプツンッ・・・

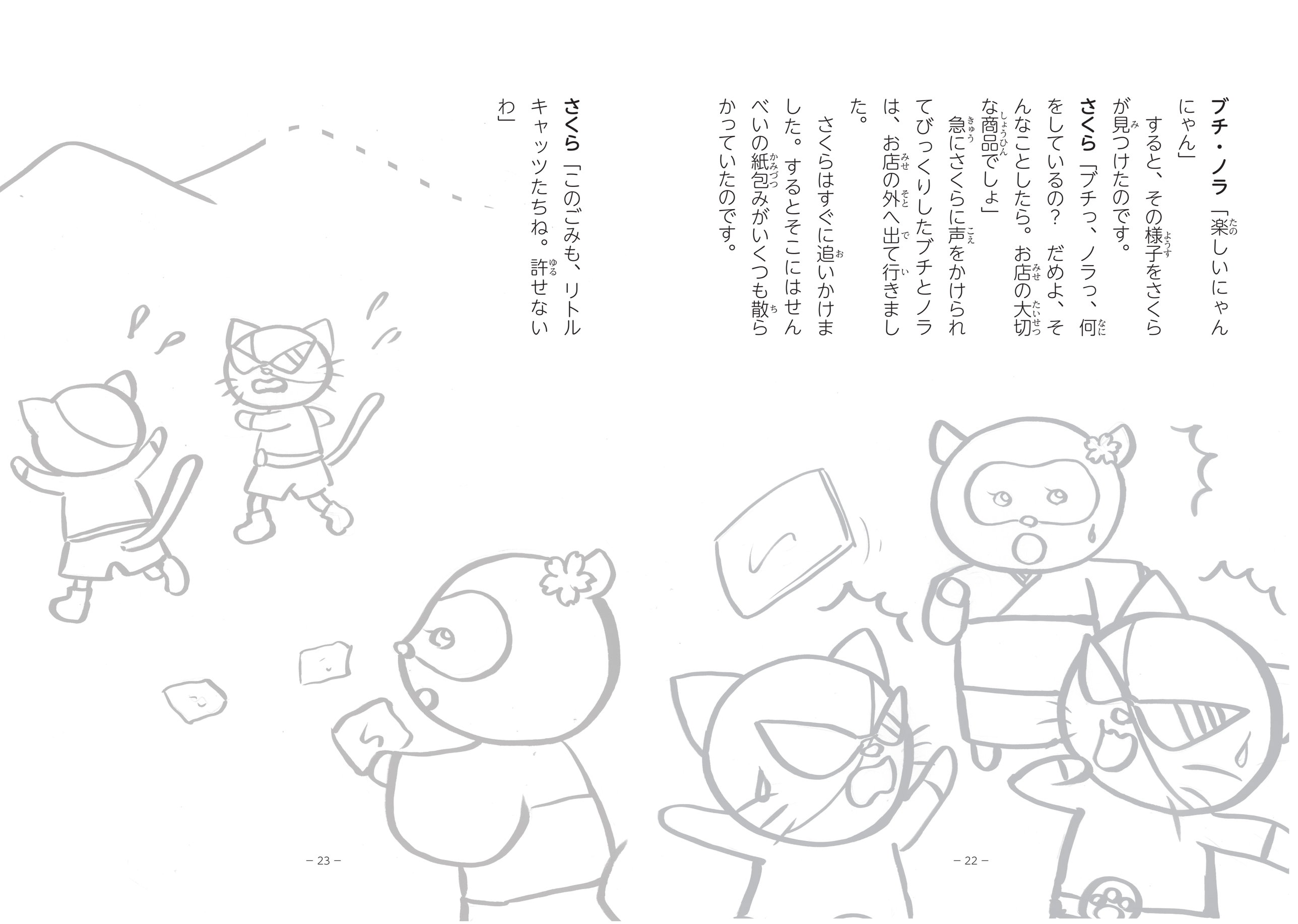
ブチ・ノラ「楽しいにゃんにゃん」

すると、その様子をさくらが見つけたのです。

さくら「ブチっ、ノラっ、何をしているの？　だめよ、そんなことしたら。お店の大切な商品でしょ」

急にさくらに声をかけられてびっくりしたブチとノラは、お店の外へ出て行きました。

さくらはすぐに追いかけました。するとそこにはせんべいの紙包みがいくつも散らかっていたのです。



さくら「このごみも、リトルキャッツたちね。許せないわ」

さくらは散らかったごみを手にして、逃げていったブチとノラのことを考えるといい気持ちがしません。

小太郎「何かあったの？」

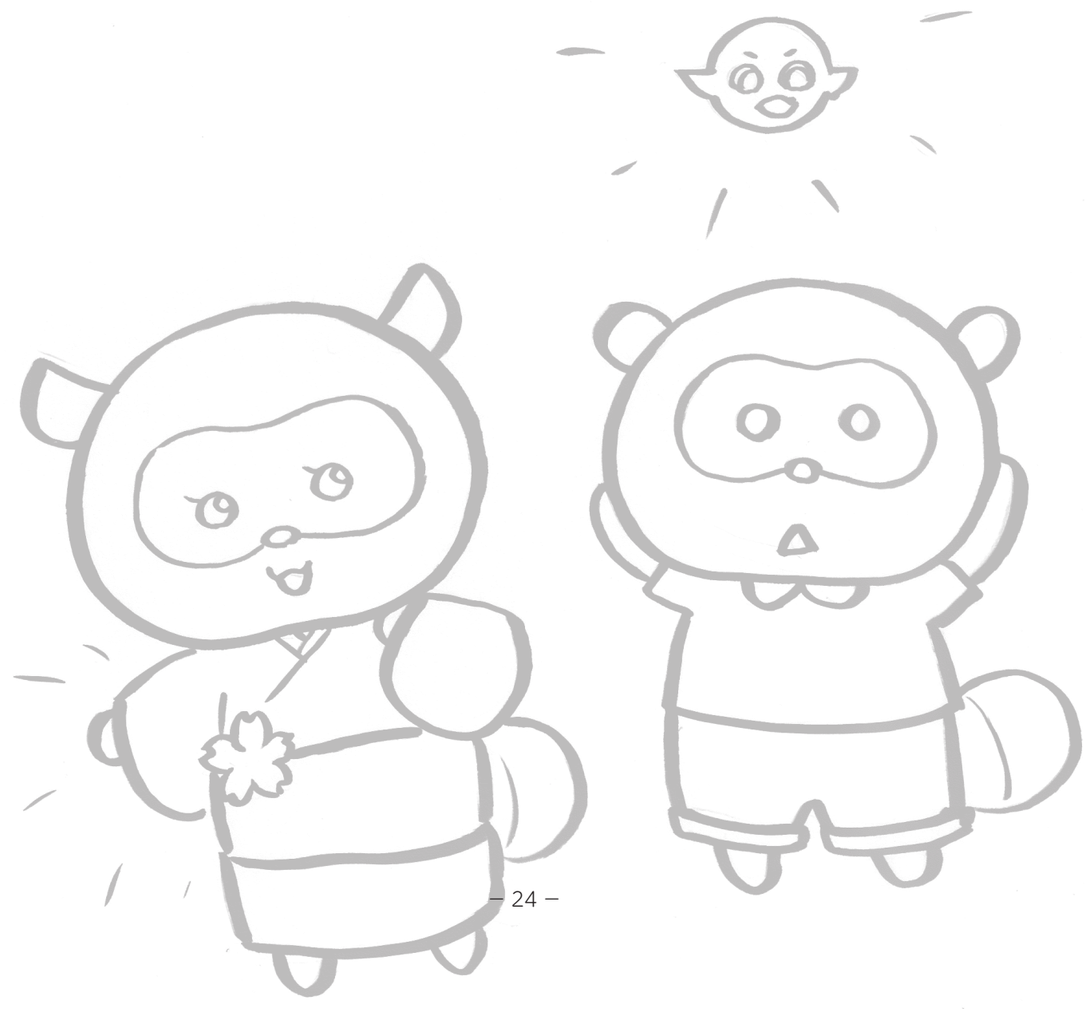
さくら「リトルキャッツがごみを散らかしたり、お店の商品にいたずらをしたのよ。そうだわ、ゆたぽんファイブに変身してリトルキャッツをやっつけましょう」

楓太「たん平っ、起きてっ」

たん平「なに？」

たん平が起き上がると、それぞれの持つアイテムが、まばゆい光から急に明るくなって光りました。

たぬきたちは、アイテムをそれぞれの頭の上にのせました。



全員「ゆたぽんファイブに変身だ」

海人「町の平和を守るために、リトルキャッツを許さないぜ」

全員「おーっ」

たぬきたちは、それぞれのアイテムを手に持ちました。

楓太「おいらたちの、必殺技を受けてみろ。もみじビンタっ」

海人「サーフィーンバリアっ」

ブチは楓太のビンタで、足がふらふらになりました。そして、海人はサーフィーンバリアで、リトルキャッツたちが、逃げられないようにしました。

たん平「ようし、おらも…みかんの皮しゅりけん」

シュッシュッ…。みかんの皮が頭や顔にくっつきます。

さくら「桜ふぶきトルネード」

みるみるうちに桜の花びらが、リトルキャッツの顔をふさぎました。

小太郎「コジローアタック」

リトルキャッツの肩をぽーんとたたくと、その場にしゃがみこんでしまいました。

リトルキャッツ「もうごみを捨てたり、お店の商品にいたずらをしないにゃん。ごめんなのにゃん」

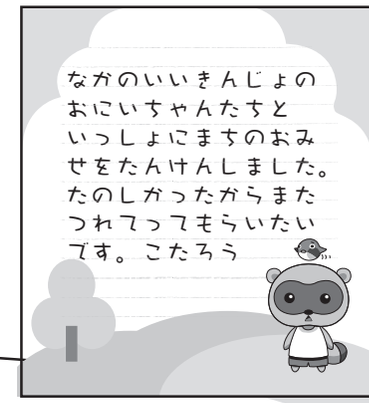
それからリトルキャッツは乾物屋にあやまりに行くと、お店のご主人に

「悪いことはいけないことだけど、それをちゃんと反省してあやまるのはとても勇気があってえらいことだよ」

とほめてもらえたのでした。

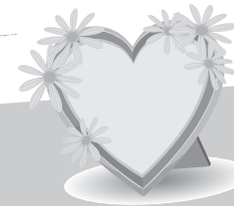
めでたしめでたし

たぬきたちが書いた町の様子を調べる宿題はどんなのができたかと言うと…。



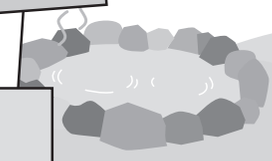
最初に干物屋さんへ行きました。お店に入ったしゅん間に海のにおいがしていました。魚を洗ったりさばいたりする人たちは、寒いところで冷たい水を使って大変そうでした。そして塩水につけた魚を外の風で乾燥させていました。それが干物になるそうです。2番目にはやおやさんへ行きました。とりたてのきゅうりをみんなで食べました。とげがあるほど新しいそうです。3番目はせんべいやさんです。手焼きせんべいだったのでひっくり返したり、しょうゆをぬったりするところを見ました。とても熱そうで煙もたくさん出ていて大変そうでした。最後に乾物屋に入りました。こんぶやかつおぶしやさきいかなどを売っていました。おわり

さくら



干物屋さんへ行った。そこには魚があったりかまぼこもあってそれを食べた。そのとなりのやおやさんへ行った。やさいを運ぶのが大変そうだった。畑へ行ってとげのついたきゅうりが痛かった。次はせんべいやに行った。おなかがぐううとなった。たん平がたん平の顔くらいの大きさのせんべいとわさびのからいせんべいを食べた。乾物屋に行った。そこにはリトルキャッツがいて、さきイカのパックに穴をあけて遊んでいた。おいらたちがそれはいけないことだよって教えてあげた。おわり

ふうた

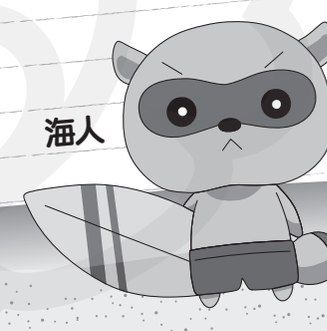


干物やでささかまぼこ食べてやおやできゅうりを食べてせんべいやさんでせんべいを食べた。どこのお店もたくさん試食できて嬉しいです。おわり

たん平

ひもの屋・八百屋・せんべい屋・かんぶつ屋に行った。みんなお店の人たちはやさしくしてくれて、働いている作業場などを見せてくれた。せんべいを焼くのは初めて見たので楽しかった。おわり

海人



みんな良く調べられましたね。
花丸をあげましょう。